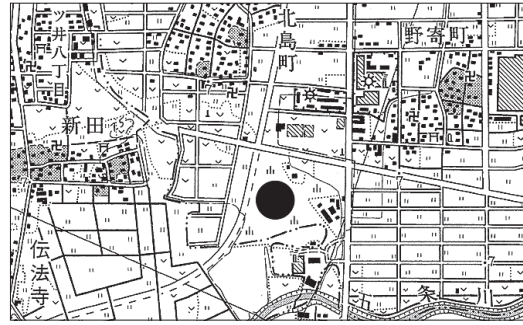


でんぼうじのだ
伝法寺野田遺跡

所在地 一宮市丹陽町伝法寺地内
調査理由 五条川右岸流域下水道建設
調査期間 平成11年4月～8月
調査面積 2000 m²
担当者 春日井 毅・伊藤太佳彦・木川正夫



調査地点 (1/2.5万「一宮」)

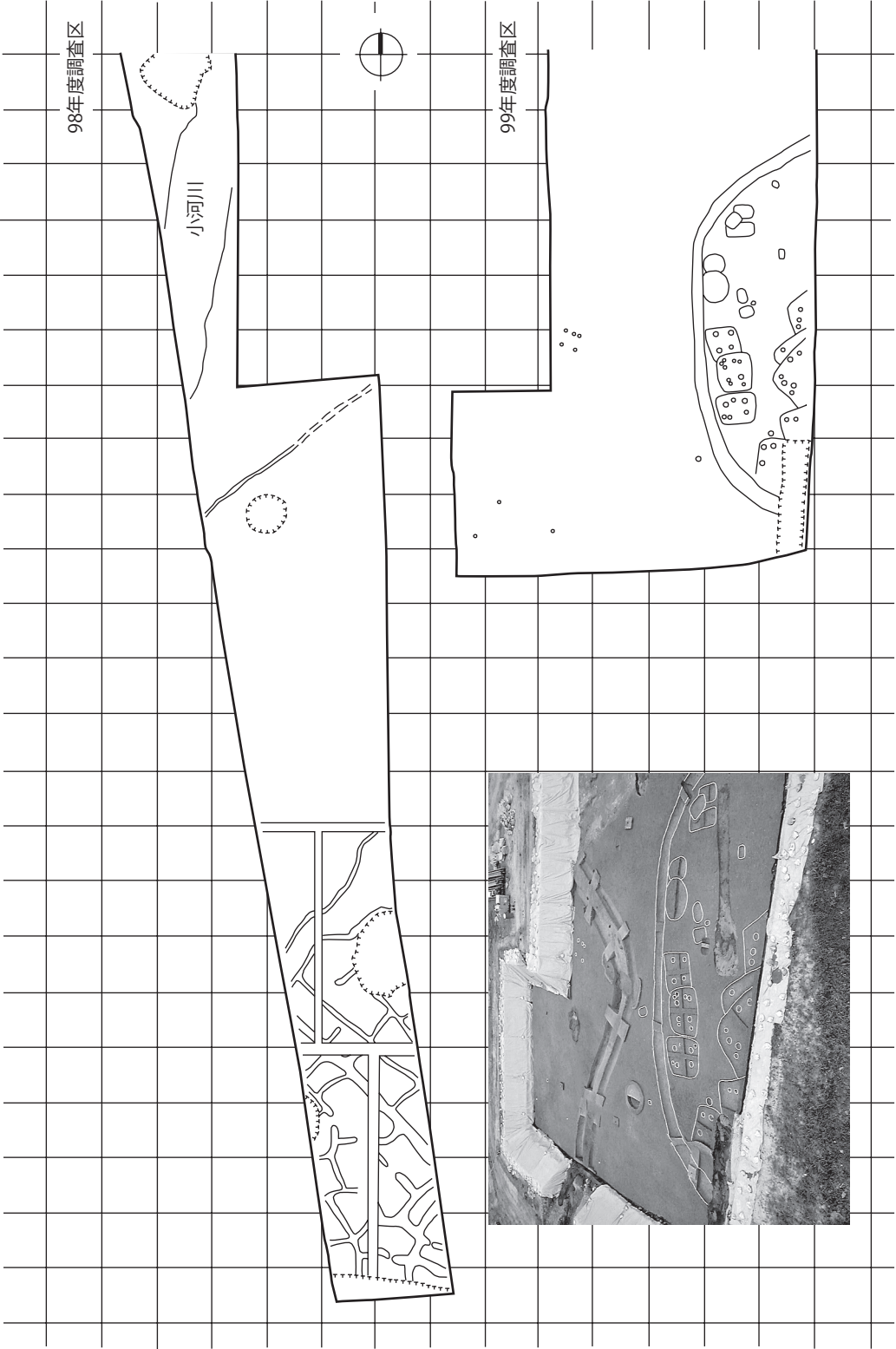
調査の経過 伝法寺野田遺跡は一宮市の南東端、丹陽町伝法寺地内に所在し、五条川がそのなかほどで大きく蛇行する地点の右岸域に立地する。発掘調査は五条川右岸流域下水道建設に伴うもので、平成10年度調査区の東側、2,000 m²の調査を行った（調査区の位置については、権現山遺跡の調査区位置図と一緒に示しておいた）。

調査の概要 昨年度の調査では、弥生時代中期中葉と考えられる水田が検出されており、大畦畔の脇からは無茎銅鏃が出土している。今回の調査区は、その水田域の北東にのびる微高地上に位置していて弥生時代中期中葉の遺物包含層の堆積はうすく、間層の灰黄色シルト層の堆積は認められなかった。

弥生時代の遺構としては、調査区の南東部分で大きく円弧を描くように溝（S D 10）が走っており、出土遺物から水田と同時期の遺構と考えられる。そしてS D 10の内側の部分では、溝に隣接する形で4基、その東側で4基の竪穴状遺構を検出することができた。いずれの竪穴状遺構からも遺物はまったく出土していないが、弥生時代中期の遺物包含層を掘り下げていく段階で検出された遺構であり、やはり水田域と関連する遺構であると考えられる。ただし西側の竪穴状遺構と溝とはかなり近接しており、少なくとも西側の竪穴状遺構については、溝よりもやや先行する可能性が高い。

中世の主な遺構としては、調査区南西部分で北東から南西方向に大きくカーブしながら並走する2本の溝がある。幅はそれぞれ50～60 cm程度だが、深さは西側（S D 15）の溝が東側の溝（S D 14）よりも深くなっている。またS D 14については、陸橋状に掘り残された部分を確認している。さらにこれらの溝の20 m程北には、幅200 cm、深さ50 cmの東西方向の溝（S D 07）がある。いずれの遺構も南部系の灰釉系陶器が主体で、おおむね12世紀のものが中心となっている。それ以外の遺物としては、S D 07からは須恵器や清郷型鍋なども出土しているが、古代の遺構は確認することができなかった。

今回の調査では、昨年度の水田に加えて、微高地上に溝や竪穴状遺構を検出することができた。竪穴状遺構に関してはさらに細かく検討していく必要があると思われるが、弥生時代の集落景観を復原していく上で大きな成果であるといえよう。（伊藤太佳彦）



弥生時代中期の遺構配置図 (1 : 600)